

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2525 号

Laparoscopic portoenterostomy. Postoperative biochemistry confirms its value for treating biliary atresia.

術後生化学検査による胆道閉鎖症に対する腹腔鏡下肝門部空腸吻合術の有効性の検討

津久井 崇文 (つくい たかふみ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は胆道閉鎖症に対する腹腔鏡下手術(腹腔鏡群)と開腹手術(開腹群)後の肝機能・肝予備能の指標である AST/ALT、 γ -GTP、コリンエステラーゼ(ChE)及び血小板(PC)の経時の変化を初めて前方視的に 10 年間に渡り比較検討した論文である。

対象は 2009-2021 年に肝門部空腸吻合を施行した 70 例(腹腔鏡群: n=40; 開腹群: n=30)で、以下の 3 群で検討されている。Group 1: 減黄自己肝生存、Group 2: 減黄するも再黄疸にて移植、Group 3: 減黄せずに移植または死亡。術後経時的に計測された Group 1 の肝機能・肝予備能を両群間で比較検討した。また、各 Group で AST/ALT、ChE、PC の結果により 8 群(全て正常、AST/ALT のみ正常、ChE のみ正常、PC のみ正常、全て異常、AST/ALT のみ異常、ChE のみ異常、PC のみ異常)に分け、その分布を両群間で最長 10 年まで前方視的に比較した。

減黄率は腹腔鏡群: 85.0%(34/40)、開腹群: 73.3%(22/30)、自己肝生存率は腹腔鏡群: 75.0%(30/40)、開腹群: 53.3%(16/30)であり、共に有意差は認めていない。Group 1 の検討では、術後 6 ヶ月時の ALT を除き、AST/ALT・ γ -GTP・ChE・PC に関して両群間で有意差を認めていない。また、8 群の分布に関しても、全ての評価時点で両群間に有意差を認めていない。

以上の結果、腹腔鏡群は開腹群と比較し、同等の術後成績であることが肝機能・肝予備能の前方視的長期的な検討から初めて示された臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士(医学)の学位を授与するに値するものと判定した。